

小田原北条氏について

はじめに

小田原北条氏（後北条氏）は、関東を5代100年にわたって統治した戦国大名家です。
1493年宗瑞の伊豆半島乱入から、氏政・氏直の1590年小田原落城までです。

戦国時代と戦国大名の特徴について、黒田基樹著「百姓からみた戦国大名」（ちくま新書）と「戦国大名」（平凡社新書）から抜粋してみました。

「戦国時代は、飢饉と戦争が日常化していた時代であり、人々にとっては生存すら困難な過酷な時代であり」「毎年毎年、端境期（1月～5月ごろ）には飢餓が訪れ、多くの人が命を落としていく、民衆にとっては生存すらが保障されていない過酷な時代であった」

「戦場では耕地が破壊され、家屋は放火され、人と物の掠奪が繰り返された。軍勢が動くこと自体が、掠奪が行われることと同意義であった」

戦国大名が統治する前は、村同士の紛争が、領主間の紛争に簡単に展開していた。

「家来同士の抗争が（日常的に）行われていると、大名が対外的な戦争を行えなくなる」

「このため家来同士の自力解決（力による解決）が許されなくなった。」

「検地により、村の境界を巡る争いはなくなり」「大名の領内では平和を確立することができた」

「年貢・公事は、個々の村人に対して、一方的に行うのではなく、村と領主・大名が契約し請書（うけしょ）を作って決められた。村の側は、年貢や公事といわれる税金を負担し、領主・大名は資金の貸し出し・外部からの侵略防止などの義務を負っていた。」

戦国大名が成り立つためには、継続的に「納税できる村が存在することが前提なので、一方的、容赦のない収奪を行うなどということはありません」「凶作時には、減免要求が村から出され（被害調査が行われ）た」

以下の本文は、黒田基樹著「戦国北条一族」に基づいていますが、イメージを掴みやすくするために勝手な要約と大幅な省略を行っています。

1 伊勢宗瑞（いせ・そうずい）

・初の戦国大名です。伊豆・相模の2国を奪取。駿河今川家の軍事顧問・東部司令官。

初代は、いわゆる北条早雲ですが、正式な名称は伊勢宗瑞（または伊勢盛時）です。

宗瑞の姉は隣国今川氏の正室で、宗瑞は今川家の家督争いに際して、義弟幼名竜王丸（後の氏親）の継承を実現させた。氏親は今川義元の父、「今川かな目録」の制作者
ア 戦国時代の始まりが、伊勢宗瑞による伊豆半島乱入のときといわれる理由

当時の伊豆半島は、足利幕府が派遣した「堀越公方」（ほりごえくぼう）の領地でした。幕府代理の領地を略奪することが、戦国時代を端的にあらわす「下克上」（した・うえに・かつ）だったからです。

イ 宗瑞の伊豆乱入と平定・・・駿河今川氏の意向

「堀越公方」足利政知の死後家督争いが生じ、1493年宗瑞は後継者・茶々丸を追放し、6年をかけて平定し「伊豆国主」となった。居城は韮山城（伊豆の国市）

伊豆乱入にあたって宗瑞は、相模国守護の大森氏（扇谷上杉家）と話をつけていた。伊豆半島は、これまで軍事的には扇谷家と対立する山内上杉家の支配下にあった。

ウ 小田原城奪取・・・まず相模国西郡を領有する

宗瑞が小田原城を攻略した時期は、正確には分かっていないが1500年頃です。

それまでの小田原城主は大森氏（元々は扇谷上杉家系：山内家に滅ぼされたか？）でした。扇谷上杉家の意向を受けての行動でした。

エ 扇谷上杉氏との敵対で相模国主となる

越後の内乱で関東管領・上杉顕定が越後に出陣する間に、関東で蜂起したのが宗瑞と長尾景春であった。宗瑞は、江戸城に肉薄するなどの展開を見せたが、上杉軍が越後から戻ると逆襲を受け、小田原城まで退却させられ、1511年上杉との間で和睦を結んだ。その後、山内上杉家内の相続争いと古河公方家内の紛争が絡み、山内家により勢力を失っていた扇谷家も一方に加担して、騒乱は再び大きくなった。

宗瑞は、これまで山内家との抗争などで支援していた扇谷上杉氏が治める相模国の中郡、東郡へ侵攻したのを手始めに、1516年三浦半島の拠点三崎城を攻略し、相模一国を手にした。

宗瑞は、長男氏綱に家督を譲った後も葦山城に在住、1年後に64歳で死亡した。

2 北条氏綱・・・居城：小田原城

・北条に改姓し、相模の国主となる。領土を拡大し、扇谷家の江戸城を攻略した。

1518年に家督相続したが、18～19年は大飢饉であったため、村からの損免要求に応じて検地を行っている。

ア 虎の印判・・・村への大名からの「公文書」の発行と目安制の導入 「禄寿応穩」

大名・領主からの公事・夫役の賦課は、これまで郡代・代官を通じて行われ、直接的には彼らの文書をもとに、その家来によって行われていた。

これに対し、伊勢氏の賦課であることを明示し、伊勢氏の本来の命令と異なる行き過ぎた徴発などが行われることを「虎の印判」を使った文書によって排除したと考えられる。

イ 北条改称・・・「他国の逆徒」からの脱却

1523年には名字を「伊勢氏」から「北条氏」に改めた。「北条氏」は鎌倉幕府の執権職であり、同時に代々「相模守」に任官されていたことに着目したと思われる。

正統な相模国主は守護職を継承していた扇谷上杉氏であったので、自身の正当性を主張するために寒川神社・三島神社など寺社造営や、北条改姓を行ったと考えられる。

ウ 江戸城の攻略

氏綱の攻勢の動きに、長く対立関係にあった両上杉家は1524年に和睦を成立させて対抗を図った。扇谷家の上杉朝興は、両家和睦交渉のために江戸城を留守にしていたが、その隙を衝いて、氏綱は江戸城の留守を守っていた扇谷家重臣・太田資高（道灌の子）を内応させ、江戸城を攻略した。その後、江戸城は、武蔵北部、下総への侵攻の拠点となる。

エ 関東管領職

氏綱が、古河公方の内部抗争に軍事介入した功績によって、山内上杉家が独占していた「関東管領職」が北条氏にも与えられた。晩年、鎌倉八幡宮の造営工事を行った。

「勝って兜の緒を締めよ」は氏綱の遺言と伝えられる。

氏綱は、1541年55歳で死亡し、早雲寺に葬られた。

3 北条氏康

・越後の上杉景虎（信玄）・甲斐の武田信玄とならぶ関東の3大戦国大名。1541年家督相続したが、大飢饉の時代だった。大掛かりな検地（代替わり検地）を行った。駿河が代替わりして義元になり、味方でなくなる。

上杉家を関東から追放し、甲州武田と駿河今川と甲相駿三国同盟を結んで越後対策としたが謙信に小田原城を包囲されて、越後に養子を送るなど外交に苦勞した。武田と結べば越後が三国峠を越えて越山し、越後と結べば武田が関東・駿河に進攻したり北関東の諸国を応援した。

1550年公事赦免状を領国に出す。(大地震があったか?)

ア 河越夜戦と上杉家の凋落・・・扇谷家の滅亡・山内家の越後への没落

1545年駿河の今川義元が甲斐武田信玄とともに、北条領の河東地域に進軍したが、これに示し合わせて両上杉氏が、河越城(もと扇谷家)を包囲した。

氏康は、今川・武田と急ぎ和議を結び駿河から撤退し、包囲された河越城の後詰として出陣した。いわゆる「河越夜戦」で、河越城の奪回に成功した。この戦により扇谷上杉家は滅亡し、旧扇谷家の松山城、岩付城等は北条の領国となった。

1548年には、山内家の膝元(藤田を攻略)まで進軍したため、山内家は長尾景虎(上杉信玄)を頼って越後に没落する。越後に逃れた山内家は、信玄に関東復帰の支援を要請した。

イ 甲相駿三国同盟(こうそうしゅん)

氏康は関東における勢力を順調に拡張していったが、他方で越後の景虎との対決に備えて、1554年に駿河の今川義元・甲斐の武田信玄との間で、甲相駿三国同盟を締結した。

ウ 氏康45歳で家督を氏政に譲る・・・政治の第一線から身を引いたわけではない

天候不順で飢餓、疫病が流行し、死者が続出したことに対して十分な対応が取れなかったことに対して責任を取ったものであった。新当主・氏政は徳政令を領土全域に発布した。

エ 謙信の越山

1560年謙信は、ついに上野に侵攻し、上野・武蔵へと進軍した。厩橋(うまやばし:前橋)で越年し、上野・武蔵の国衆のほとんどが、北条から離反して謙信に従った。翌3月には小田原城が3ヶ月間包囲されたが、謙信は攻略しきれずに帰陣した。

オ 相越同盟の展開

1568年武田信玄は、三国同盟を破棄し駿河に侵攻した。これを期に北条氏は謙信と同盟するという外交関係の大転換を図った。関東管領職を譲り、以前から信玄に従っていた羽生、深谷領を割譲し、越後に養子(後の上杉景虎:謙信の幼名)を送った。

駿河から退却した信玄は、一転して武蔵に進軍し鉢形城(氏邦)、滝山城(八王子:氏照)を攻撃し、小田原にまで迫ったが退陣し、氏照・氏邦が待つ三増峠を突破して甲斐へ帰国した。信玄は再び駿河に侵攻し駿河地域が攻め取られ、鉢形城など関東も攻撃された。1571年、氏康は57歳で生涯を閉じている。

4 氏政

・甲相同盟を復活させたが、謙信の越山を受け甲相同盟の有効性が崩れる。武田を攻め込み撃ちにするため徳川に接近する。

織田の実力を見て軍門に入ることを表明、しかし織田の武田攻略では何も得るものなし徳川と縁戚関係を結ぶが。上洛を甘受しなかったことは、戦国大名としては止むを得ない選択だったか?

ア 甲相同盟復活

相越同盟が武田氏との抗争で有効でなかったことから、密かに見直しが進められ、1571年甲相同盟を復活し、「国分」(くにわけ:支配領域を決めること)が行われた。

イ 上杉との攻防

甲相同盟の締結で、再び北条・武田連合と上杉の抗争が展開された。

氏政は1572～74年に北武蔵の羽生城・深谷城、北下総では関宿城を攻撃した。上杉謙信も越山し、鉢形、忍、松山、館林、新田の各領に放火したのち羽生城を自ら破壊し越後に帰った。一国に相当するといわれた関宿城（せきやどじょう：野田市）を攻略し、利根川と常陸川水系とを連絡する交通上の要地を抑えることができた。

1575年に入ると小山城や上総地区に侵攻して、これらの攻略に成功しているが、佐竹氏を中心とする北関東の結束は強かった。

ウ 御館の乱と上野支配権

1578年越後の上杉謙信が死去すると、景虎と景勝による家督争いが発生する。（御館の乱）（氏康による越相同盟に基づいて送られた）景虎は、兄氏政に援軍を求めたが、氏政は従軍中であつたため、武田氏に援軍を頼んだ。しかし武田氏が期待に応える動きをしなかつたため、景勝の勝利に終わった。これ以降、北条は武田氏との対決にむかう。

エ 遠交近攻策

武田勝頼は、駿河への侵攻を進める一方、佐竹氏ら関東の反北条の諸将と盟約を結んだ。氏政は遠江の徳川家康と結び、武田氏を挟撃する策に出た。氏政は、家康と盟約を結ぶと、さらに織田信長への接近を図った。

この後も武田勝頼は鉢形城を攻撃したり、由良（太田）・館林・富岡各領を攻略した。

オ 織田政権への従属

1580年氏政は、織田信長に「御縁辺相整え、関東八州御分国に参る」との使者を派遣した。婚姻関係の成立を要請し、関東を信長の領国のうちに差し出すことを表明した。

このころ、氏政は嫡子氏直に「軍配団扇」を譲渡し、軍事指揮権の譲渡した。その後も最高指導者として君臨を続けたが、氏直との婚儀を進めるためと思われる。

カ 信長による武田氏攻略

1582年信長の嫡子信忠・重臣滝川一益を先鋒とする織田軍により、武田侵攻が開始された。織田氏の出陣を知ると、北条氏は上野、駿河の両方面に出陣した。

勝頼は織田軍の攻撃に耐え切れず、武田家は滅亡する。

この戦果配分で、上野は滝川一益に、駿河は徳川家康に与えられたが、北条氏は全く配分にあずかれず、北条の支配下にあつた東上野が信長の領土となり、北条は上野からの後退を強いられた。

直後に信長が本能寺の変で死亡すると、北条氏は滝川一益を上野から追放する。滝川一益が没落して生じた空白を巡って、徳川、越後上杉、北条が草刈場とした。

北条氏は、この戦争の中で徳川氏と対峙する場面もあつたが、後に家康の娘が氏直に嫁すことになり、同盟関係が築かれた。

このときの徳川氏との国分で北条への帰属が決まった「真田領」は、ただちに解決されずに、やがて訪れる小田原合戦勃発の伏線となつた。

5 氏直

- ・ 秀吉との戦に勝利できなかった盟友家康が秀吉に屈服し、惣無事令を突きつけられる。氏政上洛の条件を懸案であつた沼田領の回復としたが、沼田城主の思いがけぬ名胡桃城奪取事件により、これが北条方の秀吉への反抗と看做され総攻撃を受けるに至る。

1580年19歳で家督を相続したが、落城に至るまで父・氏政との2頭体制が続いた。

ア 秀吉の影

1583年北条氏は、上野・下野の国衆を圧迫したが、羽柴秀吉が越後の上杉に上野への進出を働きかけたり、佐竹方を支援したりしたため、容易に攻略は進まなかった。

1584年中央では、羽柴秀吉と徳川家康が「小牧・長久手合戦」を繰り広げていた。

沼田領を治めていた真田氏が、徳川から離反し上杉についたことから、徳川の要請で上田城を攻めたが、攻略できなかった。

イ 徳川家康の屈服

小牧・長久手合戦は、秀吉の優位で決着がついたが、秀吉はさらに全国制覇への道を進め、家康に対する政治的圧迫を強めたため、対秀吉で北条との同盟関係を強めてきた家康であったが、1586年に秀吉に屈することになった。

ウ 惣無事令の発令

秀吉は、家康を上洛させると、諸大名の面前で秀吉への服従を表明させられた。このとき、秀吉は「関東・奥領国惣無事令」を発令し、家康にその執達（通達）を家康に命じた。秀吉従属下の大名は、秀吉の承認なくしては、他大名との交戦はできないというものであった。

一方、北条方では家康の上洛が不調の場合に備えて、大規模な出陣準備を整えていたが、家康からは「惣無事令」にたいする返答を求められた。

エ 諸城大普請と軍備の強化

北条氏は、秀吉の惣無事令を受諾するか否かを明確にせず、その一方で領国全域で防御体制の構築を進めた。鉄砲、弾薬を鑄造するために梵鐘の供出を命じたところもあった。大筒の鑄造、船の新造、購入等を行って備えた。小田原城の9 kmに及ぶ惣構も当時のものである。

オ 籠城態勢の構築と民衆の疲弊

1589年末から翌90年初めにかけて、87年末に続き籠城態勢がとられ、このときは妻子、郎党（家臣）、兵糧、荷物まで各城に入れるよう命じられた。

空前の大動員体制の構築のために、年貢の未納、領民の（逃走による）欠落・退転が発生し、家臣のなかにも同様の事例が見られ、空前の動員が疲弊を招来させた。

カ 小田原合戦

1588年になると、秀吉の意向を受けた家康は、北条氏に対し秀吉への出仕を勧告し、北条氏はこれを受けて秀吉へ従属する旨の返事をした。

キ 沼田城問題と名胡桃城事件

秀吉は、氏政か氏直の上洛・出仕を北条氏に要請し、これに対し北条は沼田城問題の解決を条件とした。裁定条件が決定され、北条方もこれを受け入れ、1589年に沼田城主には氏邦の重臣猪俣邦憲が入城した。

しかし、1589年の年末に邦憲が、利根川対岸にあった真田領の名胡桃城（なぐるみ）を攻略するという事件が起きた。

秀吉は、これを裁定条件に対する重大な違反行為と捉え、氏政が直ちに上洛しなければ、北条を追討する、また名胡桃城事件の張本人が成敗されなければ、北条氏を赦免しない旨を伝えた。北条氏はここに至っても、氏政の上洛の延期を図るとともに、名胡桃城事件については無関係であると強弁した。ここで秀吉は自らへの従属を拒否したものと判断し、12月13日に諸大名に北条追討の陣触を発した。

ク 小田原合戦

1590年3月3日徳川家康・織田信雄・羽柴秀次の東海道軍との間で小田原合戦の幕が切って落とされた。たちまち山中城・足柄城などが攻略され、4月中旬には小田原城は

包囲された。また、前田利家・上杉景勝・真田昌幸らの北陸軍は3月15日碓氷峠に達し、松井田城・箕輪城・河越城・厩橋城など上野・下野から武蔵北部を制圧した。

浅野長吉・家康配下からなる東海道軍の別働隊は、玉縄城・江戸城・岩付城を攻略し前田と合流し6月初旬鉢形城を攻略した。八王子城も攻略され、忍城を除くすべてが攻略され、本城小田原城だけが残された。

秀吉軍は、6月には向い城として石垣山（一夜）城の構築を終え、本陣を移した。

こうした戦況の悪化をうけて、6月に入ると氏直は、羽柴軍との和睦を本格的に模索し、6月24日に秀吉の家臣2名と城内で面会し、7月5日には投降、自らの切腹と引き換えに城兵の助命を嘆願した。秀吉は、この申し出を「神妙」としたが、氏政・氏照等を切腹させ、氏直を助命した。

氏直は、弟氏規らとともに高野山で蟄居の身になるが、後に秀吉に赦免され、知行を得ている。戦前・戦中に秀吉・家康との間で取り次ぎ役を果たした氏規も知行を得ている。二人の赦免には自分の娘を氏直に嫁がせた家康の働きが大きかった。

6 その後の小田原城について

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/kanko/odawaracastle/history>

北条氏滅亡後、徳川家康に従って参戦した大久保氏が城主となり、城は近世城郭の姿に改修されました。その後、大久保氏の改易にあたり、城は破却されましたが、稲葉氏の入城の際に再整備され、城の姿は一新されました。1686年に再び大久保氏が城主となり、小田原城は東海道で箱根の関所を控えた関東地方の防御の要として幕末に至りました。

小田原城は、明治3年(1870)に廃城となり、大正12年(1923)9月の関東大震災により御用邸のほか石垣もほぼ全壊し、江戸時代の姿は失われました。

*城址公園に復元されているものは、残念ながら北条時代のものではありません。旧城は線路の反対側の城山の地区にありました。